

# 第十五回目

発行責任者

員弁組連研部会長

蓮成寺 藤田 智善

講師（員弁組長）

赤尾 浄光寺 石本 龍憲師

第十五回目のテーマ

『自他ともに心豊かに生きる』  
とはどのようなことでしょうか。

## 【皆さんの主なご意見】

1. お寺や地域との「つながり」「きずな」は、これからどう変わっていくか。

○会社勤め、高齢化等で、葬儀のありようが変わってきた。

○葬儀が簡素化してきたの理由で、迷惑をかけたくないというのは詭弁では。

○家族葬が増えてきて、見送りたいが見送れない。さみしい。

○生きている人の為の仏教でないと廃れる。

2. 一緒にいて安心できる人は。どんな時に安心できるか。

○若い頃は友達だったが、今は家族が安心できる。

3. あなたにとって、お寺とは。

○住職の人柄で、寺とつきあっている。

○お寺は金がかかる。

○お寺がもつと情報発信して欲しい。

○お布施ははっきり言って欲しい。

○お寺や地域とのつながりを望む。子どもへのアプローチが大切。

○過疎化がすすみ、寺の護持が難しい。

# 第11期

②心安らぐ場  
日校の卒業生2人が、中学校の帰りに寄ってくれた。  
中学校の様子などを聞きながら懇談した。お寺に来てくれたこれだけでもうれしい。

# 連研だより

①自灯明法灯明  
お釈迦様が涅槃に入られるとき、弟子の阿難が何を頼りに生ければよいかとの問いに答えての最後の説法が、自灯明法灯明。「自らを灯とし、法を灯とせよ」。  
生きていくのは他人ではなく自分、評論するのではなく我がごととして聞法し思考し、そして行動せよ。その拠り所とするのが仏法である。

号【まとめ】  
お寺とは。原語は、「ビハーラ」と言い、最心安まる場で、精舎（しようじや）と言年う。お寺は、「心身の安らぎの場」。仏教は、生老病死の苦悩を課題として、教えにより心身の安らぎをあたえるもの。  
浄土真宗のお寺は、み教えを聞く場、道場として発展した。  
心身の安らぎを得るためのポイント

のに、その後この2人がとった行動に驚いた。

それはアミダ様の前に座り、「らいはいのうた」を勤め始め、「三つの約束」を唱えた。

勤め終わった2人の、なんとすがすがしく、安心しきった顔であることか。

中学生は、日校を通じて阿弥陀様のお慈悲にふれていた。

アミダ様のいらっしゃるお寺が、この子等の居場所であった。

お寺は、今私のことを思い「あなたを必ず仕合わせにするぞ」と働き通しのアミダ様がおられるところで、いつでも会える場所がお寺なのだと改めて気づかされた。

## ③お寺を「真のサンガ」に

お寺を取りまく環境は、決してよくない。

檀家の後継者難、法事が減、墓じまい、若者の宗教離れ↓中高年の宗教離れ、等々。

お寺は、住職・その家族のものではない。

門徒だけのものでもなく、寺を取りまく多くの人（ご縁ある人）に開かれるべき存在である。

本来の活動（仏教儀礼・伝道布教）に加え、積極的にまわりとの関係を深め、それぞれのお寺の特徴を活かしながら、お寺を真のサンガにしていこう。  
これが、自他ともに心豊かに生きるということである。

